自分にしかできないこと

中部中・２　大谷　佳愛

「いつかかならず、日本の植物のすべてを明らかにする。」

私は、この言葉を見たとき、そんなことできるはずないだろう、と思った。でも、牧野富太朗の人生をたどっていくうちに、この言葉には富太朗の生き方そのものが表れている気がした。

毎日通る通学路、学校の校庭、近所の公園、私たちが普段見ている景色にはいつも植物がある。スーパーに並んでいる野菜、花屋の軒先に飾られている色とりどりの花、すべて植物である。私たちの生活には植物があふれている。

私は小学生の頃、道ばたに生えているタンポポを摘んで小さな花束を作ったことがある。きれいな黄色が集まって美しい一つの作品になったような気がして、うきうきした。でも、そのときの私は、摘んだタンポポがなんという種類のタンポポなのか知らなかったし、中学生になった今でも、タンポポにどんな種類があるのかなんて未だに知らない。

そんな私が、この本に出会って、植物の見方ががらりと変わった。この本と出会ったことで、私の中の世界が一つ広がった気がした。

日本の植物学の父と評された植物学者、牧野富太朗。小さい頃から好奇心が強く、何かに夢中になると、それに向かってまっしぐら。誰よりも植物を愛し、日本の植物学を発展させることに人生を捧げた。富太朗は、九十四年の人生の中で植物についての本や雑誌を数多く出版した。富太朗の植物についての知識や経験、たくさんの人の支えがあって実現したことだった。しかし、植物が好きなあまり、借金をつくって家族に迷惑をかけることもあった。それでも、富太朗を励ましたり、支えてくれたりする人がいたのは、富太朗の植物に対する熱意や温かい人柄が多くの人から愛されていたからだ。そんな富太朗の人生は、毎日が植物にあふれ、そして温かい人々に囲まれた人生だと感じた。富太朗の植物への強い想いに心を動かされた人がたくさんいたことを知った。

私は、本を読んだり、映画を見たりして、私自身が心を動かされたことはあっても、私が誰かの心を動かした経験は今までにない。だから、たくさんの人の心を動かした富太朗の言葉、行動、生き方に感動した。自分の大好きなものや自分の誇れるものをきわめて、誰かの心を動かすことができるのは、本当に素敵なことだと思った。

「草木はわたしの命でありました。草木があってわたしが生き、わたしがあって草木も世に知られたものが少なくないのです。草木とはなんの宿縁があったものか知りませんが、わたしはこの草木が好きなことが、わたしの一生を通じてとても幸福であるとかたく信じています。」

富太朗が晩年にのこした言葉。こんなにも植物を愛し、植物を探求し続けた人物が他にいるだろうか。私が何気なく摘んだタンポポにも富太朗の熱い想いがつまっていたかもしれない。そして、私たちの身のまわりにある、ごく当たり前の出来事一つ一つに誰かの生き方や想いがつまっているかもしれない。そう思うと、身近なこと、当たり前の時間の流れ一瞬一瞬をもっと大切にしたいと思った。

何かを見たい知りたいと思ったらわかるまでとことんやる、という富太朗の性格が少し自分と重なった。私も、美術の授業で作品を作るとき、うまくいかないところがあると気になってしまうし、勝負事で負けると悔しい気持ちになるなど、負けず嫌いなところがある。私は諦めてしまうことがあるけど、富太朗は挫折を繰り返しながらも自分のやりたいことをやり通した。だから私も、やると決めたことは最後までやり通す、納得がいくまで粘り強く挑み続ける心をもちたい。

牧野富太朗の生き方を通して、これから夢を追いかけていくうえ

で大切なことを学んだ。一つは、自分がやると決めたことに正面から向き合い、常に挑戦し続けること。もう一つは、日常にあふれている当たり前の出来事一つ一つに目を向け、私たちが生きている一瞬一瞬を大切にすること。そして、自分の大好きなもの、自分の誇れるもの、自分にしかできないことに自信をもてるのは素敵なことだということ。

私も自分自身と正面から向き合い、常に自分の限界に挑み続ける人でありたい。日々の一瞬一瞬に感謝し、自分にしかできないことに自信をもてる人でありたい。

そして、牧野富太朗が夢を追い続けたように、私も、夢に向かって自分の道を進んでいく。

4・9